2011
vol.16
Feb

黄河の森
KFG

発　　行／特定非営利活動法人
黄河の森緑化ネットワーク
常務理事・事務局長／矢 野 正 行
編集責任者／一 木　　仁

〒650-0011
神戸市中央区下山手通り2丁目12-11
神戸華僑会館内
TEL・FAX:078-392-8328
E-mail:kouganomori@s6.dion.ne.jp
URL.http://www.k3.dion.ne.jp/~kougakfg
IP:05031111874

しし鍋食べ、いざ紅葉狩り（丹波市の小野尻庵）

ああ あの大河 太古より 流れる誇り
ああ その緑 永久に たやさぬ心
燃えたつ生命 ここに ここに

CONTENTS

P.2 内蒙古オトカ前旗で緑化支援へ
P.3 蘭州植樹ツアー報告
P.3 植樹ワーキングツアーに参加して
P.4 私と環境(14)　クヌギやコナラの枯れ
P.4 絵本からのエコ・メッセージ12
P.5 黄土高原の植物15
P.5 2011年度植樹とクリーンキャンペーン日程
P.5 しし鍋、アイガモ ― 丹波の秋満喫
P.6 天空の寺院ポタラ宮を参観
P.6 中華義荘で慰霊の植樹

小渕基金の助成決定

3月から

内モンゴル・オトカ前旗 砂漠化土地で緑化活動

日中緑化交流基金（小渕基金）の助成を受けて、内モンゴル自治区で、砂漠化した土地の緑化支援を行うことが決まりました。従来の蘭州市での植樹も継続しますので、黄土高原の２カ所で植樹・緑化を展開することになります。

昨年６月末、三井物産環境基金による蘭州での助成事業が終了しました。これに伴い今後ＮＰＯ「黄河の森緑化ネットワーク」の中心となる活動をどうするか、理事会でいろいろ議論しました。三井の基金から引き続き助成を頂くことは、蘭州に限らずほとんど無理ということになりました。また、

蘭州市黄土高原およびオトカオルドス高原での植樹

以前から申請を考えていた小渕基金の助成を得るには、蘭州市ではすでに他の団体が同基金から助成を受け活動しているため、これも可能性はほとんどないとのことでした。

そこで４年ほど前から、神戸大大学院の留学生だったウリト氏を通じて緑化支援の打診があった、内モンゴル自治区オルドス市オトカ前旗での砂漠緑化活動を行うことにより、小渕基金の助成を申請しようとの結論に至りました。

2010年６月には徳岡正三顧問，林青彦前事務局長と私の３名でオトカ前旗を訪れました。活動場所を視察し、オトカ前旗副旗長とも打合せ、作業計画書を頂きました。申請書提出には徳岡顧問の大変な努力とお力添えを頂き、12月には無事助成決定の通知を受け取りました。

緑化支援地はオトカ前旗城川鎮フルス村で、蘭州の北東約600キロ、マオウス沙地南縁に位置します。

今回の活動場所は、全くの砂漠地帯であり、今までの蘭州黄土高原とは全く異なった活動内容になると考えています。

活動期間は昨年12月から１年間となっていますが、実際の活動はこの３月から始まる予定です。緑化面積は33.5ha、スナヤナギとヒツジシバを各8万3250本、計16万6500

砂漠化した緑化予定地

６月の現地視察にて

本を植栽し、防風、砂地固定などを行います。費用は525万2000円で、うち500万円は小渕基金からの助成です。

今年の３月には現地を訪れ、オトカ前旗人民政府林業局と今年の作業計画を打ち合せ、協定書を締結し、砂漠緑化活動を進める予定です。今年を含め３年間は小渕基金の助成を申請し、100haの砂漠緑化を進める予定です。

オトカ前旗側は副旗長をはじめとして、植樹協力はもちろん重要であるが、それよりも日本との国際交流、国際協力ができることが一番大切であり、ありがたい事だと考えているようです。これに答えるために、現地の人々と植樹するツアーを６月に実施する予定です。

会員の皆様にもぜひ多数参加していただき、オトカ前旗での砂漠緑化活動を成功させたいと考えています。なにとぞ、よろしくお願致します。

（常務理事兼事務局長　矢野正行）

＊蘭州とオトカ前旗の比較＊

	蘭　　州	オトカ前旗
カウンターパート	甘粛省 蘭州市 南北両山環境緑化工程指揮部	内蒙古自治区 オトカ前旗人民政府 林業局
場　　所	北山の大砂溝	フルス村
土地の状況	黄土丘陵	起伏が緩い砂丘地
植栽する植物	コノテガシワ、ベニスナ	スナヤナギ、ヒツジシバ
植栽の方法	上水造林と三水造林	沙障（防風垣）保護下の植栽
目　　的	風景林、水土保持林の造成 （水土流失の防止）	固砂林の造成 （砂地の固定、飛砂の防止）

少人数でも中身濃い交流

蘭州植樹ツアー
来年度以降も着実に

2010年度の蘭州への植樹ワーキングツアーは、第Ⅱ期緑化事業の終了後第Ⅲ期緑化事業契約前と言う端境期に当たり、また６月に三井物産環境基金助成事業の総括として蘭州で写真展・シンポジュームを開催し、多くの会員が蘭州を訪れた経緯もあり、参加者は今回初めて参加いただいた阪急阪神ホテルズの山澤社長はじめ18名と少なめでした。しかしながら少人数が故に、蘭州市南北両山緑化指揮部の職員との中身の濃い交流ができ、大変有意義な植樹活動となりました。

ただ、今年は例年になく夏の降雨が少なく、我々が到着するまで約３カ月間も雨が降っていないとのことで（到着日に多くの雨が降る）、植樹行程が計画通り進まず、2011年度に2010年度分がずれ込む事もいたしかたない状況です。

第２期植樹地にて

また、昨年度は現地ＮＧＯの「緑駝鈴（ＧＣＢ＝グリーン・キャメル・ベル）」と協働植樹を実施したのですが、今年度はこれがうまく行かず、現地ボランティアとの協働植樹および蘭州での植樹ボランティア組織立ち上げと云う目標は2011年以降の課題として残りました。指揮部の方々には我々の考え方を理解して頂いていますので、あまり性急な事はせず着実に歩んで行きたいと考えています。

（常務理事兼事務局長　矢野　正行）

植樹ワーキングツアーに参加して

植樹緑化の力認識

京都新阪急ホテル
葉　英　福

日本やアジアの経済は中国なくして語れない時代に突入し、昨年７月からは中国人向け個人観光ビザの発行要件が大幅に緩和され、４億人を超す中間層の観光需要を取り込み、訪日旅行者数の飛躍的な拡大が見込めるようになりました。

当社「阪急阪神第一ホテルグループ」も、日頃より多数の外国人観光客を受け入れていますが、今後ますます多くの中国人観光客が来日される時局に鑑みて万全の受入体制を早急に整え、これからの中国戦略をどうすべきかを真剣に考えています。

今回、初めて中国蘭州市での植樹活動に参加させて頂きましたのは、中国の今を知らずにビジネスは語れないということもありますが、まずは互恵の精神で日本と中国の共存共栄を図ることを目的とし、中国国家計画委員会が1999年に設定した全国生態環境建設計画での炭酸ガス排出量削減と、黄河上中流地域や長江上中流地域での土壌流亡や砂漠化の防止に貢献するため、日本人と華僑が互いに協力をしながら緑化・環境保全を目標に活動している貴団体に加入させて頂きました。

上海より空路２時間半を経て、標高1,900ｍの蘭州中川空港に到着し、最初に目にした光景は、周囲全体に高くそびえ立つ荒れ山でした。荒れ山というよりは高い砂山でした。そして、このような所から黄砂が偏西風に乗って日本や朝鮮半島に深刻な影響を及ぼしているのかと改めて認識いたしました。

中川空港から専用バスで第１期・２期事業により植樹した皋蘭県（サイランケン）に向かう１時間強の車窓からの風景も、そそり立つ荒れ山以外は何も見えるものはなく、空漠とした山脈の光景に驚嘆いたしました。

蘭州市南北両山緑化指揮部が管理する緑化教育基地「緑博園」に到着し、地球環境保護のために今後何十年にもわたる壮大な緑化計画が脈々と続くことを教わりました。この乾燥した厳しい自然条件のもと、荒れ山が本当に緑化するのかと半信半疑でした。しかし、その後、約10年の歳月をかけて緑化を進めているという「蘭州日中友好林」の現場を視察した際に、以前に参加していたメンバーの方々が口を揃えて「大きく育ったな」と感動にひたっている様子を目の当たりにし、植樹緑化の可能性とかつてない「夢・感動」を覚えました。

余談ですが、実は当社の企業理念は、「お客様に夢・感動をお届けすることで心豊かな社会の実現に貢献する」というもので、私の胸中は一刻も早く今回の植樹ワーキングの現場に行き、１本でも多くの植樹をしたいと思っていました。

本年７月から約３カ月間、雨が降っていない植樹ワーキングの現場は想像を絶するサラサラの砂山で、植樹をするある一定の高さ（約7～8m）に登り着くだけでも足元の踏ん張りが利かなく、滑り落ちそうでした。

山腹の傾斜地に段が設けられた植樹場所に辿り着くだけで息が切れ、足場もかなり悪く、スコップでサラサラの砂を掘り、いざポット苗を植えようとした瞬間に、掘ったサラサラの砂がまた植えようとした穴に落ちて来て、要領を得るまで時間がかかりました。

当社山澤社長と私も息を切らしながら悪戦苦闘し、最終的には約１時間で20個前後のポット苗を植えるのが精一杯でした。

かなり危険で体力の必要な作業でしたが、こうした地道な努力が幾年後かには苗が大きく育ち、地球環境保護に貢献し、日中交流促進と相互理解を深めるものだと感動体験いたしました。

今後とも、日中両国間における文化芸術交流・経済交流そして平和友好交流など多岐にわたる交流をとおして、一人でも多くの中国人が日本を訪れ、一人でも多くの日本人が中国を訪れることを心から祈念し、植樹緑化活動の継続は力なり、意志あるところに道は開けると信じています。

私と環境(14) 庭木の健康診断 番外編

── クヌギやコナラの枯れ ──

樹木環境研究会議「ミルフィーユの会」
天野孝之

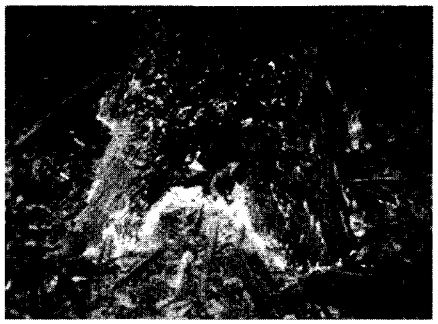
最近、関西地域でコナラ、クヌギ等の落葉広葉樹の枯れが騒がれ出してきています。樹木が枯れる原因はいろいろありますが、その原因の一つに甲虫の仲間であるカシノナガキクイムシ(以下キクイムシと言う)が関与している場合があります。

このキクイムシはブナ科樹木の大径木を好んで加害します。ブナ科樹木とは、落葉性のクリ、ブナ、イヌブナ、クヌギ、カシワ、ナラガシワ、ミズナラ、コナラ、アベマキ等であり、常緑性ではウラジロガシ、ウバメガシ、ツブラジイ(コジイ)、マテバシイ、アカガシ、アラカシ、イチイガシ、シラカシ、ツクバネガシ等を含みます。

被害は特定の地域で断続的に発生していましたが、1980年代以降急速に拡大しました。日本海側の秋田県、新潟県などで激しく枯れ始め、やがて石川県、福井県、京都府、兵庫県へと南下しながら拡がってきました。これらが滋賀県や京都府福知山市、京都市内、京田辺市と南下し、最近は奈良県奈良市内、兵庫県神戸市まで枯損の被害が拡大しています。昨年の様に例年にない猛暑が被害拡大に影響しているように思われがちですが、このキクイムシは気温が30℃を越えると活動は鈍ります。猛暑よりももっと大きな原因が関与しています。

それはブナ科樹木の大径木化です。化石燃料が多量に使われるまでは、クヌギ、コナラなどは炭用原料や薪にあるいはシイタケ原木として直径10～20cmの中径木として伐倒利用されていました。その結果、大径木までは育たず、キクイムシの加害対象木は、ごく限定されていました。

薪炭林の放置が今回の枯れの根本原因です。なぜ大径木に加害するかは、十分解明されていない点もありますが、軟弱な材の辺材量が多いからかもしれません。辺材に比べ心材は死んだ部分で、腐朽を防ぐためにリグニン等が多く含まれています。これらを忌避し辺材部分を加害する、材内がキクイムシで過密になってくると新材部まで加害するのでしょうか。



株元に溜まった木屑

生きた材、すなわち水分が通る辺材部分を体長４～５㎜、幅１㎜ほどの小さなキクイムシが数千から数万匹も１本の木に集団加害します。材に爪楊枝ほどの太さの穴をあけ、木屑を材外へ排出します。この時材内の穴にブナ科樹木を枯らす病原菌を持ちこみます。数千、数万匹のキクイムシが排泄する木屑は、樹皮に溜まり、あるいは株元に落ちて雪のように積もっているのが夏以降の被害木で観察できます。これらの枯死木から翌年６月から９月ごろまでに何十倍、何百倍にも増えた新しい成虫が、健全なブナ科樹木へと飛び出していきます。被害は大きくなるばかりです。

枯れ木の伐倒・薫蒸処理による駆除や防除方法が考案されていますが、１本１本の木にビニールやネットを被覆処理して行く単木的な方法を行っているのが現状です。

神社仏閣の壮厳さや風光明媚な森を保つために巨樹を守ることを優先すべきと考えます。守るべき木を明確にして、ビニルーシート被覆などを行う必要があります。里山、都市近郊林や社寺林、鎮守の森等では農薬の散布は人に対する被害だけでなく、他の生物にも大きく影響を与えるため使用はできないでしょう。今後新たなより良い防除方策が期待されます。

道路沿い、人家近くあるいは社寺仏閣近くの大径木が枯れて倒れれば、人身事故、文化財の損壊が考えられます。しかし、これら傾いて、またねじれて育った背の高い大きな枯れ木を伐倒するのはとても危険で、切り倒すことのできる技術者も少ないのが現状です。

被害の拡大を防ぐために早期発見早期駆除が必要です。カシ類がキクイムシで枯れるのは、キクイムシだけの単一原因ではなく、酸性雨や温暖化も誘因になっているとも考えられ、原因を複合的に考えることも重要です。しかし樹木が大きくなっていなければキクイムシは増えないので被害は発生しません。

「黄河の森」も六甲山で植樹活動や里山整備を行っています。会員が参加されている国交省の「講習会」を参考にしながら、適正な森の管理について検討していただければ、よりよい「森づくり」ができると思います。

絵本からのエコ・メッセージ 12 おしゃべりな毛糸玉

ＫＦＧ会員　畑中弘子
(児童文学者)

一人暮らしで、寒がりのうめばあさんが残り毛糸を集めて、かたかけを編んでいます。つなぎ目がかわるたびに、思い出がどんどん広がります。これは孫のおくるみ、これはみよこのセーター、これはよくなついた猫のミューの色。「あ、これは……」

青い毛糸に変わったとき、うめばあさんはおじいさんとすごした日々をなつかしく思い浮かべます。よくふたりで海をながめたものでした。出来上がったかたかけをはおって、鏡に写してみました。「おや、まあ！」

なつかしい人たちが次々、かたかけからとびだし、口々に話しかけてきます。「うめや、わしがついてるぞ」「お母さん、こんどはあたしのケープをあんで」「ばあちゃんのジャムをべろっちゅしたい、にゃーん」とか。うめばあさんは不思議なかたかけのおかげで、元気に冬をすごします。やがて春がきて、かたかけはおしゃべりをしなくなりますが、うめばあさんはいいことを思いつくのです。「これをまた毛糸にもどして、またかたかけをつくればいいんだ！　こんどはどんなおしゃべりがきけるかな？」

再利用の毛糸玉で、愉快で楽しいエコ生活をしているうめばあさんのお話です。

沢田俊子・作
小泉るみ子・絵
文研出版

黄土高原の植物⑮

アブラマツの横でヒツジが「泣いた」
－こんなにも違うか南山と北山－

ＫＦＧ顧問　徳 岡 正 三（元高知大学農学部教授）

はじめて中国を訪れたのは1988年である。No.4でお話したように黄土高原の北に広がるオルドス高原の図克(トゥーカー)というところでいろいろ勉強をさせていただいた。

２か月余り滞在した宿舎の調理場横の敷地に数十本の油松（アブラマツ)が植わっていた。ある日、この調理場横に少し小ぶりの愛くるしいヒツジがつながれていた。私を見てメエーと鳴いた。ヒツジの鳴き声は何となく悲しげだが、このときは特に哀愁を帯びた「泣き声」に聞こえた。それもそのはず、その日の夕食のおかずはこのヒツジの肉だった。アブラマツを見ると、あの愛くるしいヒツジや調理場横の風景を思い出したりする。

蘭州市の中心市街を黄河が流れ、その北の山並みを北山、南のそれを南山と呼ぶ。ＫＦＧの緑化支援地が北山のまん中あたりにあり、大きな木がまったくない荒れ地であることを植樹ツアーに参加された方はよくご存知である。北山の多くはこうした荒れ地が広がる。ところが南山には高木が育ち、樹林や森林といえるところが多いのである。緑化支援地からは50kmほどしか離れていない。これは地形的な関係でこの一帯で局地的に雨が多く、高木の生育を可能にしているのである。あのアブラマツも育っていた。

アブラマツは中国で広範囲に分布

内蒙古自治区フフホト市のアブラマツ街路樹

南山

北山

しており、黄土高原でもよく見かける木である。「甘粛林業」（No.89、2005年)という雑誌でも、甘粛省の郷土種として紹介されている。私は「黄土高原といえばアブラマツ」という印象が強かったので、はじめて北山の緑化支援地を訪れたとき、なぜアブラマツを植えないのか、まっさきに馬金山指揮に尋ねてみた。ここでは育たないという返事だった。やはり雨の少なさが原因だろうか。

ところで、クロマツやアカマツは「マツ」としてよく知られている。確かにクロマツは樹皮が黒っぽく、アカマツは赤っぽいのが多い。もし樹皮の色で識別に自信がないときは、もう一つ意外と知られていない簡単な識別法がある。マツは一般に夏頃から翌年の春まで成長を止めるが、そのとき枝の先端に芽（冬芽）をつける。この芽の白いのがクロマツ、赤いのがアカマツである。これは樹皮の色よりも確実に識別できる。

クロマツもアカマツも枝から２本一組になって針のような葉が出ている。これを２本束生という。ゴヨウマツ（五葉松）はその名のとおり、葉が5本一組になって枝についている。これを5本束生という。マツ(正確にはマツ属）にはもう１つ３本束生がある。ただしこれは日本には分布しない。それやこれやで世界にマツの仲間は100種ほどある。

アブラマツは日本には分布しないが、樹皮の色がクロマツと似ている。そういえばアブラマツは中国では「黒松」ともいう。もちろん日本のクロマツとは違うが、同じ２本束生である。アブラマツはクロマツやアカマツと親戚ともいえるマツである。

丹波のしし鍋に舌鼓

小野尻庵、シシが飛び込むボタン鍋―。民謡デカンショ節にも歌われている丹波名物「しし鍋を食す会」が11月27、28両日、ＫＦＧ会員の三角修一さんご夫妻経営の農家民宿「小野尻庵」（丹波市山南町)で開かれた。京阪神と地元計16人が参加、野性味あふれる冬の味覚を楽しんだ＝**１面に写真。**

まず訪れたのは、世紀の大発見・丹波竜の発掘現場。発見者の一人、村上茂さんから当時の様子や丹波竜について説明を受けた。村上さんは「木か何かと思って掘り出したが、当時は恐竜なんて考えもしなかった」という。泥岩を割って化石探しを楽しんだ後、名物薬草の湯で心身ともにリラックスし、民宿へ。

イノシシは三角さんの知り合いが猟で獲ったもの。赤身がきれいな肉で、ミソ仕立てのうえ山椒味がよく効いていて生臭さはまったくない。地元の野菜との相性も抜群で、ビールにも日本酒にも合い、食べると体がほかほか。また、地元の村上鷹夫さんが有機農法の水田で育てたアイガモを自ら焼いてサービスしてくれた。濃厚な味で、こちらはワインにぴったりで、すぐに売り切れの人気だった。

翌日は、石龕寺、円通寺、高源寺の丹波３山にプラスして高山寺の４寺の紅葉名所をめぐった。山を覆い尽くすモミジは幾分盛りを過ぎていたが、それでも目を洗われる鮮やかさ。昼食には但丹境近くの山里で手打ちそばを味わい、晩秋の丹波を心行くまで満喫した。

六甲山クリーン＆グリーン活動

六甲山植樹 －住吉山手７期植樹－

●2011年３月12日(土) 植樹
　　３月19日(土) 予備日
　　６月４日(土) 下草刈り
　　９月３日(土) 下草刈り
●集　合　ＪＲ住吉駅南側　９時
●服　装　長袖、帽子
●持参品　弁当、水筒、軍手、雨具、タオル

六甲山クリーンアップ活動
－身近にできることから始めよう－

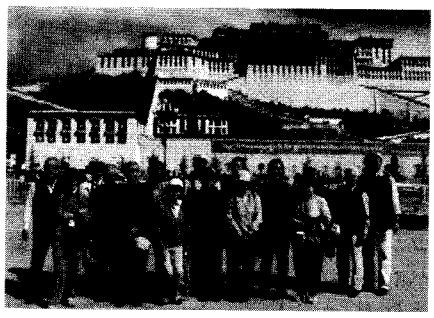
●日　時　2011年４月９日(土)
　　10月８日(土)
●集　合　阪急岡本駅　９時
●歩　行　約３時間
●コース　ゴミ、空き缶集めをした後、住吉山手の記念植樹地で春は、花見。秋は栗拾いと昼食。
●持参品　弁当・水筒・雨具・タオル・ビニール袋・軍手
●リーダー　矢野 正行
●サブリーダー　安本 昭久

参加できる方は事務局までお知らせ下さい

天空の寺院ポタラ宮を訪れて

ＫＦＧ事務局長　矢野　正行

蘭州での植樹を終え、９月21日午後９時50分、西寧からラサに向け、24時間の列車の旅が始まった。青海省からチベット自治区に入る頃になると気圧のせいか、だんだんに頭が重くなり、心なしか息苦しくなってきた。それもそのはず、標高4500ｍを越しているとの事である。そこから約10時間、夜の10



時頃やっとラサに着いた。少し体調がおかしいのでアルコールは飲まずシャワーだけ浴びて布団に入った。急に寒気に襲われ、一時はどうなる事かと思ったが、１時間くらいで何とか治まり、就寝することが出来た。高山病に掛る危険があるときはガイドの言う通り、アルコールは勿論、風呂やシャワーも控えるほうが良いと言う事を痛感した。

翌23日、ポタラ宮参り。紺碧の空に白と茶色のコントラストが映え、天空の城そのものであった。内部の参拝は階段が急で、また千年にも亘り増築増築を繰り返したのであろう迷路になっており、ちょっと動くと息切れがして大変であった。祭られている仏像は日本とは異なり、色鮮やかで顔立ちも彫りが深く、何よりも大きいのが特徴的である。ただ、日本の仏像のような穏かな神秘的な表情は無いように思われた。

宮殿の外の広場では、チベット各地から集まった信者が、五体投地を繰り返しながら寺院に向かう姿が見られた。信仰心の厚さを感じ、同じ大乗仏教でありながら、日本との違いを改めて思った。しかし私には、日本のように信仰を深くするのも、浅くするのも自由。その中でたまに寺の本尊の前に座り、ゆっくり静寂を楽しみながら自分を見つめるのが合っているような気がした。

親睦会のご案内

本年度も会員の親睦を図るため、「竹の子刈り」と「しし鍋会」を企画しました。竹の子刈りは会員の池田さん、しし鍋会は同じく会員の村上さんのお世話です。

＜竹の子刈り＞

場所　京都府相楽郡和束町
日時　2011年４月29日（金）
　　10時現地集合

持参品は昼食，飲み水，軍手，タオル，雨具（天候による）。農作業のできる服装でお願いします。現地集合、現地解散です。

＜しし鍋会＞

場所　兵庫県丹波市山南町
日時　2011年11月中旬の土、日曜日で１泊２日の予定
費用　約7000円
　　（アルコール，交通費別）

会員の三角さんの経営する民宿に泊まり、「しし鍋」を賞味します。

慰霊の桜20本を植樹

神戸市長田区の「神阪中華義荘（墓苑）」で、阪神淡路大震災16周年も間近となった12月12日、震災犠牲者の冥福を祈念する植樹が行われました。財団法人「中華会館」からＫＦＧにも参加の呼びかけがあり、当日は事務局から５名の会員が参加しました。

同墓苑には48名の華僑・留学生の慰霊碑が建立されており、2004年に慰霊の桜の木が植樹されました。しかし苗木の多くが根付かなかったため、このたび改めて補充の植樹を行うことになったものです。

会員による慰霊植樹

桜の苗木は今回も「鎮魂の桜並木（レクエムロード）」を神戸市内をはじめ、全国で作る運動を続けている歌手のしらいみちよさんからの提供をうけたものです。苗木は高さ約３ｍのエドヒガン・コヒガンの２種類を、墓苑の駐車場に20本植えました。植樹の作業後には参加者全員で慰霊碑に線香を供え、不慮の死を遂げた犠牲者の冥福を祈りました。

◆日華実業協会主催チャリティーゴルフ

毎年頂いているチャリティーゴルフの寄付金を、2010年度も９月１日、神戸・第一楼において９万4000円頂きました＝**写真**。関係各位の方々には大変感謝いたします。今年度からは内モンゴルでの砂漠緑化も始まります。蘭州での黄土高原緑化活動と合わせ有効に使わせていただき、大きな成果を上げるよう努力する所存です。

チャリティーゴルフ

◆インドの子供向けに英語版日本民話

ＫＦＧ監事の洋画家辻恵子さんが昨年、日本の民話を題材に、インドの子ども向け英語教材「日本の民話（GrandpaCherry Blossom and other folktales from Japan）」を出版、神戸・北野のギャラリーで出版記念の絵本原画展も開きました。

絵本は「花咲か爺（じじい）」「舌切りすずめ」「かさ地蔵」など８話を収録。１話につき５点ずつ計40枚の水彩画が描かれています。一般の日本の挿絵とはタッチが異なっていて、懐かしい中に、どこかエキゾチックで、深い精神性を感じさせます。

現地の教育ＮＧＯの依頼で制作に携わった辻さんは「インドのおおらかさと日本の民話の持つ優しさを、子どもにも大人にも感じてもらいたい」と話していました。

原画展では、原画と英文を並べて展示。明るく、優しい色調の絵と手書き風のアルファベットがマッチして、独特の世界が人気をよんでいました。